



●春からはピーマンの栽培が始まります。害虫の駆除には天敵を使い、有用菌を取り入れることで病気にかかりにくくするなど、なるべく農薬を使わない工夫をしています。



●栽培前には必ず土壌診断を受けて施肥設計を行い、不足している分だけを補うことで肥料のやり過ぎを防いでいるそうです。



明日を語ろう！ 北の農業人

KITANO NOUGYOUBITO



北海道農業に限りない愛情を注ぎ、
たゆまぬ努力を続ける人々がいいます。
農業の未来を創造する「北の農業人」の
情熱や取り組みをご紹介します。

●施設園芸によるブランド野菜づくりで魅力ある農業を創出
冬期に無加温での施設園芸に挑み、
農業所得の向上と通年雇用を目指す。
農業の楽しさを発信しながら、
未来へと引き継いでいくことが使命。

「名寄市」
かんだファーム代表

神田勇一郎さん



●神田さんは2013年にかんだファーム代表に就任。なよろ星空雪見法蓮草生産組合長、名寄市もち米生産組合理事、名寄市グリーンツーリズム推進協議会理事などを務め、さまざまな活動を展開しています。



●タンクトップ姿が神田さんのトレードマーク。タンクトップや帽子にはかんだファームオリジナルのロゴマークが入っています。

積極的に施設園芸を導入し 通年での営農に取り組む

名寄市の北東部に位置する東風連地区は、忠烈布川をはじめ大小の川が流れる沢地帯にあります。かんだファームの代表を務める神田勇一郎さんは、ミネラル豊富な沢水と寒暖差のある自然条件を活かし、施設園芸による葉物野菜の栽培に取り組んできました。

神田さんは祖父の代から続く農家の3代目。入植した当時は、荒地で水はけも悪く、農業には不向きな土地でしたが、祖父や父親が長い年月をかけ、地道に改良していったそうです。父親たちの働く姿を見て育った神田さんは、小学生のときに農家になることを決心。地元の農業

高校と本州の園芸専門学校で農業を学んだ後、富良野のメロン農家で修行をし、2000年、20歳のときに実家に戻って就農しました。

「当時は豆類や大根なども作っていましたが、これからは地域の特産であるもち米と、収益性の高い施設園芸に注力していく」と考えました。1棟だったビニールハウスを3年ほどかけて7棟に増やし、既につけていたピーマンのほかにメロン栽培を始めました。

2009年には通年営農による所得と雇用の安定化を目指し、冬期のホウレンソウ栽培に乗り出します。ビニールハウスはタイパーで補強して二重の被膜で覆う構造にすることで、耐久性と保温性を高めつつコストを抑え、名寄市の補助

試行錯誤で得たノウハウを共有 仲間と共にブランドを強化

「なよろ星空雪見法蓮草」と名付けられた寒締めホウレンソウは糖度が13度にもなる甘さと、生で食べられるえぐみの少なさが特徴です。2017年には野菜ソムリエサミット初となる最高金賞を受賞するなど、今では高い評価を受けていますが、栽培を始めた当初は知名度が低く、売れない日々もあったと振り返ります。少しずつ味の良さが伝わり、関心

を持った若手農家たちが「自分もやってみたい」と神田さんに声をかけてきたことで転機が訪れました。

同じ志を持つ仲間を得た神田さんは、2015年に「なよろ星空雪見法蓮草生産組合」を設立。農林水産省の「攻めの農業実践緊急対策事業」の対象となり、新たなビニールハウスの導入など生産体制の整備と拡大を進めました。同組合には現在6戸の農家が加入し、決められた出荷基準のもと、寒締めホウレンソウを生産しています。

「栽培の苦労がわかっていいるから、自分からは誘いません。でも、やりたいという意志を持つている人には全てを教えます」と神田さんは言います。土づくりの方法や失敗例など、自分が培ってきたノウハウをオープンにしているのも、生産組合全体の技術を上げ、「なよろ星空雪見法蓮草」のブランド力を強化するという目標があるから。今後はマニュアルを発行し、生産規格などを確立することで、さらなる品質向上を図りたいとしています。

近年はホウレンソウを使った商品づくりにも取り組んでいます。野菜加工品研究会を立ち上げ、地域の社会福祉法人



●なよろ星空雪見法蓮草と特産のもち米を使った大福。すぐ売り切れるほどの人気商品です。

農業の魅力発信し いきいきと働ける未来を描く

神田さんが手がける野菜には、「なよろ星空雪見法蓮草」のほかにも、「かぜのかおりピーマン」や「エキノメグミアスパラ」など、個性的な名前が付けられています。その野菜が育った環境が目に浮かぶような、心に残るネーミングには「生産物に関心を持つてもらい、地域の農業を活性化したい」という神田さんの思いが込められています。SNSによる情報発信を積極的にしているのも、農業の魅力や楽しさを多くの人に伝えるため。それが自分の使命でもあります。

近年は地元の小中学校での出前授業や、名寄大学の学生さんに農作業のアルバイトをしてもらうなど、若い人と農業をつなぐ活動も重視しています。小学5年生の娘さんが「将来は農家になる」と言ってくれたことで、「子どもたちが憧れを持っているような農家であり続けたい」という思いを強くしたそうです。

「農業を次世代に引き継いでいくには、通年で人を雇用し、収益を確保できる仕組みが必要。誰もがいきいきと働ける農業を実現するのが夢ですね」。そう話す神田さんの笑顔からは、伝統を担う農家の誇りと、生まれ育った地域への愛着が伝わってきました。